

福岡方言の文末助詞バイ・タイの代替形式について

井上 紗良

(言語文化学部 アラビア語科)

キーワード：日本語の方言，福岡方言，文末助詞

0. はじめに

福岡市を含む肥筑地方には当該方言を特徴づける文末詞バイ、タイが存在する (平川 2008: 116)。本稿における福岡方言とは、福岡県福岡市で使用される方言を指すこととする。同方言は肥筑方言の筑前方言に属する (陣内 1997: 2)。本稿の目的は福岡方言の文末助詞の実態と代替形式について明らかにすることである。若年層に特化した研究は見られなかったものの、高年層における現在の使用状況に関する研究は管見の限り見当たらないため、意義あるものになると考えた。例文においては、理解の便を図るため、問題となる文末助詞および標準日本語に訳しづらい文末助詞をカタカナで記す。なお、本稿では文末詞と文末助詞の両方の用語を用いているが、特に意味に違いはない。

1. 背景知識

本節では福岡方言の代表的な文末助詞バイとタイについての背景知識をまとめる。平川 (2008: 116) によると、福岡方言における文末助詞バイおよびタイは以下のような特徴を持つ。

- (a) バイ、タイはいずれも平叙文にのみ生起し、ト、ゲナの後、ネ、ナの前の位置に生起可能なモダリティ形式である。
- (b) バイは、発話時において聞き手にとって新規である (と話し手が判断する) 情報を提示する機能を持つ。
- (c) タイは、発話時において聞き手にとって新規である (と話し手が判断する) 情報を、自己の知識へ確認・照会した上で提示する機能を持つ。
- (d) バイとタイに共通するのは「聞き手には発話時において当該情報が無い」とする話し手の判断である。
- (e) バイは発話時における新規情報を提示する以外の機能は持たないが、タイは提示する情報を話し手が自己の知識や記憶に照会・確認するという機能が付加されている。タイの様々な語用論的意味はこのために生じる。

文末助詞バイとタイは (多少の意味的な違いを除けば) 互いに置換できることもあるが、常にできるとは限らない。両文末詞が共起することはない。

これらのことから、文末助詞バイとタイにはそれぞれ異なる意味特性があり、話し手により場面に応じて使い分けられているということが分かる。

2. 高山 (2016) の研究

2.1. 節では調査方法を、2.2. 節では調査結果と考察を示す。

2.1. 調査方法

高山 (2016) は、福岡市のうちの博多部に限定した先行研究の多さから、福岡市の中でも博多部を除くその他の地域 (高山は福岡部と表現している) の、若年層を対象とした使用状況を調査している。

調査方法として、「話し手の情報獲得源 (現実、推論、記憶、常識)」「聞き手にとっての情報の新旧」「聞き手を必要とするか否か」「タイの基本的な機能から派生する多様な語用論的意味 (断言、なだめ、言いきかせ、突き放し等)」「丁寧語との併用」に重点を置き、バイ・タイがそれぞれ用いられるような調査項目を設定している。バイ 15 項目 (普通体に後接するもの 11 項目[1]-[11]、丁寧体に後接するもの 4 項目[36]-[39])、タイ 28 項目 (普通体に後接するもの 24 項目[12]-[35]、丁寧体に後接するもの 4 項目[40]-[43]) に、それぞれ、(い) 用言に後接するもの、(ろ) 体言に後接するもの、の 2 問ずつを設定し、体言に後接できない「ます」 ([38]、[42])、「ました」 ([39]、[43]) は、代わりに、(は) ヨルもしくはトルに後接しないもの、(に) ヨルもしくはトルに接続するもの、の 2 問を設定している。さらに、カモフラージュのための質問文 14 問を加え、計 100 問の質問文を作成し、11 名のインフォーマントに回答してもらっている。回答形式は、標準語で提示した文の内容をインフォーマントが発話するならばどのように表現するのか、自由に書き換えてもらう形式である。インフォーマントは、福岡市に在住し、言語形成期のほとんどを福岡部で過ごした若年層 (19-29 歳) であり、必ずしも生え抜きではない。

2.2. 調査結果と考察

普通体に後接するバイに関して、バイを用いた回答は一切なかった。11 名のインフォーマントの他に、他地域若年層 1 名、福岡部壮年層 1 名、福岡部中年層 1 名に回答してもらっており、福岡部 2 名に使用が見られた。つまり福岡市福岡部の若年層はバイを用いず、世代差がみられた。

普通体に後接するタイに関して、タイを用いた回答の項目はわずか 5 項目のみの使用であり、非常に限られていた。そして回答に 1 回でもタイを用いたインフォーマントは、11 名中 6 名と約半数であった。この調査での重要な考察を以下にまとめる。

・特に「 [31] その場の推論によって導出した知識について、相手の賛同を期待する」は、福岡市福岡部の若年層において、タイが最も用いられる場面である。

・福岡市福岡部の若年層において、聞き手を必要とする (相手のいる) 場面でよりタイが使われやすい傾向がある。

・全体を通してみると、用言に後接しにくい傾向にあるが、「 [35] 予想・想像していた事態との不一致・意外性」ではその傾向が弱い。

・聞き手にとっての情報の新旧はタイを用いるか否かには関わってこない要素である。

丁寧体に後接するバイ・タイに関して、丁寧体で回答された文には、バイもタイも一切用いられていなかった。これは福岡部の若年層のみではなく、他地域や壮年層・高年層も同様であった。

3. 先行研究の問題点

高山 (2016) は、以下のような問題点を挙げている。

筆記での調査において、アンケート調査の設問で用いられた標準語での問いにつられて、普段の会話より多く標準語を用いた回答となった可能性について改善の余地があるといえる。加えて、福岡部の他年層での実態との比較も行う必要があるとしている。

そこで本稿では、異なる年齢層でバイやタイがどのように捉えられ用いられているのか、どのような代替形式が用いられているのかをみていく。

4. 調査

本稿では、高山 (2016) が使用したアンケート項目を用いて筆記調査を行う。結果として出た世代による違いが重要であると考えたため、高年層と若年層それぞれから回答を収集し、離れた世代のデータを比較することで、文末助詞に起こった変化をみていく。質問項目は、特に結果に違いが出ると考えられるため重要であると考えた 26 問である。20-70 代 (2022 年現在) の男女計 25 名に、質問文の下線部分を記述式で自由に書き換えてもらう形式で、Google フォームにて回答してもらう。アンケート調査の対象としたのは、言語形成期 (おおむね 3~15 歳まで) の間のほとんどを福岡市及び図 1 に示した地図内の太線の内側の福岡市近郊地域で過ごした人である。インフォーマントの情報を表 1 で示す。なお以下では、20 代と 30 代前半を「若年層」、30 代後半から 60 代前半を「壮年層」、60 代後半と 70 代を「高年層」とする。したがって若年層は A~G、壮年層は H~T、高年層は U~Y である。

表 1: インフォーマント一覧 (年齢順)

略号	性別	年齢	M	男	40 歳
A	女	21 歳	N	女	41 歳
B	女	21 歳	O	女	49 歳
C	男	21 歳	P	男	50 歳
D	男	21 歳	Q	女	51 歳
E	男	21 歳	R	女	52 歳
F	女	21 歳	S	女	60 歳
G	男	30 歳	T	男	62 歳
H	男	35 歳	U	男	67 歳
I	男	36 歳	V	女	74 歳
J	女	37 歳	W	女	75 歳
K	女	37 歳	X	男	76 歳
L	男	40 歳	Y	男	76 歳

図 1: 福岡県の地図

(47 都道府県の地図 <https://uub.jp/map/fukuoka/>より)



4.1. 質問項目について

本調査では、高山 (2016) で用いられた質問文を用いているが、高年層にも回答を得る必要があり回答者の負担を減らすため、回答の下線部の長さを変えた部分がある。さらに、高山 (2016) が改善点として挙げていたことから、より自然な回答を得るために、用いられた質問文の一部の標準語を、実際に福岡方言話者である筆者が方言形に書き換えた。()内は筆者が付けた通し番号である。[]や(い)(ろ)の番号/記号は高山 (2016) の記述のものと揃えた。

4.2. 調査結果

アンケート調査の結果、タイ・バイの使用がみられたものの、特に若者の間ではヤン、ヤロなどの代替形式が多く用いられており、高年層においても一部その使用が確認された。そして、タイに比べバイの使用は少なかった。バイに関しては、全体的に使用が少ないものの、質問文によっては使用が多いものも確認された。表 2 に高山 (2016) で用いられたバイとタイの機能別の項目に沿った使用状況、図 2 に年代別の各質問文におけるバイとタイの回答状況を示す。

表 2: 項目ごとのバイとタイの使用状況

想定される 回答			実際の回答 (人)	
			タイ	バイ
タイ	〈聞き手を必要とする場合〉			
	A 聞き手にとっての新規情報 (1)~(10)	(い) 用言に後接するもの	21	8
		(ろ) 体言に後接するもの	22	1
	B 聞き手にとっての既存情報 (11)~(16)	(い) 用言に後接するもの	4	2
		(ろ) 体言に後接するもの	13	2
	〈聞き手を必要としない場合〉 (17)~(20)	(い) 用言に後接するもの	9	3
(ろ) 体言に後接するもの		4	2	
計			73/500	18/500
バイ	〈聞き手を必要としない場合〉			
	(21)~(24)	(い) 用言に後接するもの	3	7
		(ろ) 体言に後接するもの	8	1
計			11/100	8/100

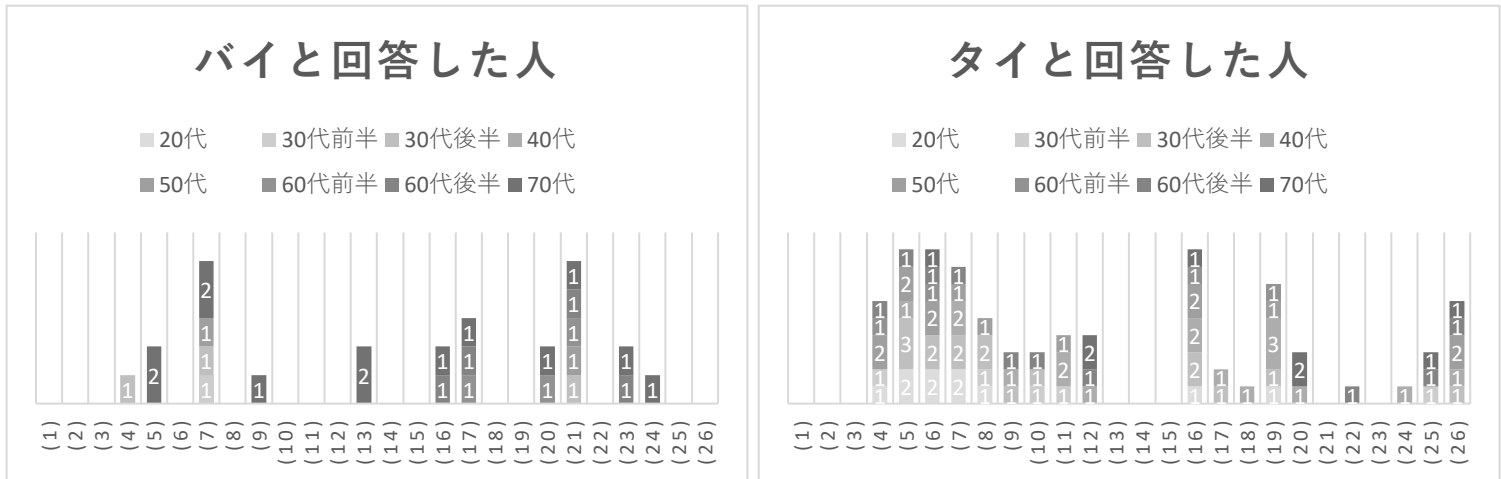


図 2: 年代別の各質問文におけるバイとタイの回答状況

(7)(い) 「いつもそんなだから、母さんに怒られるんだよ。知らないからね！」

>怒られるとバイ、怒られるバイ、しかられるとバイ

(21)(い) 「(省略) このままじゃ勉強する時間無くなるよ！ってことになって…」

>無くなるバイ、ないバイ

(6)(ろ) 弟「なんしよう？」 あなた「勉強だよ！」

>勉強しよるッタイ、勉強タイ、勉強しよッタイ

4.3. 調査結果の分析

今回の調査において、20代や30代がタイを用いた回答は、聞き手を必要とする場合、特に聞き手にとっての新規情報の場合に集中していた。これは高山(2016)が挙げている、「若年層において、聞き手を必要とする(相手のいる)場面でよりタイが使われやすい傾向がある」という記述が正しいことを示している。

それに対して、「特に「[31] その場の推論によって導出した知識について、相手の賛同を期待する」は、若年層においてタイが最も用いられる場面である」という記述は、該当する質問文(11)(12)にわずか30代1名の回答しかいないため、当てはまらないといえる。

「全体を通してみると、用言に後接しにくい傾向にあるが、「[35] 予想・想像していた事態との不一致・意外性」ではその傾向が弱い」という記述に関して、該当する質問文(19)にタイを用いたのは7名であり、たしかに他の設問に比べると多い。しかし、用言に接続する他の例、例えば、「[16] 断定・相手にうむを言わせない語気を持つ」に該当する質問文(5)はタイと回答した者が10名、バイが2名、「[19] 突き放し・見放し」に該当する質問文(7)においては、タイが8名、バイが5名となり、用言にこれらが後接しにくいとは言い難い。

「聞き手にとっての情報の新旧はタイを用いるか否かには関わってこない要素である」に関しては、聞き手にとっての新規情報に該当する(1)~(10)ではタイが比較的好く用いられるのに対し、既存情報に該当する(11)~(16)のうち、(13)~(15)ではタイが一切用い

られず、(11) (12) (16) においても使用が少ない。このことから、情報の新旧がタイの使用に関わってこない要素である、とは言い切れない。

また、今回の発見として、体言に後接するものに該当する質問文のうち、(6) (8) (12) (16) (22) において、バイ・タイに限らず助詞が後接せず名詞で終える回答が各世代でみられたことが挙げられる。

(6) (ろ) 弟「なんしよう？」あなた「勉強だよ！」→(実際の回答: 勉強 1名)

これらの質問が、「[16] 断定・相手にうむを言わせない語気を持つ」「[19] 突き放し・見放し」「[31] その場の推論によって導出した知識について、相手の賛同を期待する」といった、タイの基本義から派生する語用論的意味を想定したものであったことから、強調のニュアンスが加わる時に名詞終わり¹になりやすいのではないかと推察される。

代替形式については、高山 (2016) の、「一部の設問で半数以上が代替表現の「ヤン」等に代わっており、バイが「ヤン」「ヤガ」に置き換わっていることを示したものの、機能が似ていることから標準語の「ヨ」との置き換えがされやすい」との記述に関して、今回の調査においては、高山 (2016) が定義する方言形のヨとの置き換えが特に若年層に多くみられ、30代後半や40~60代前半までの壮年層にもみられた。

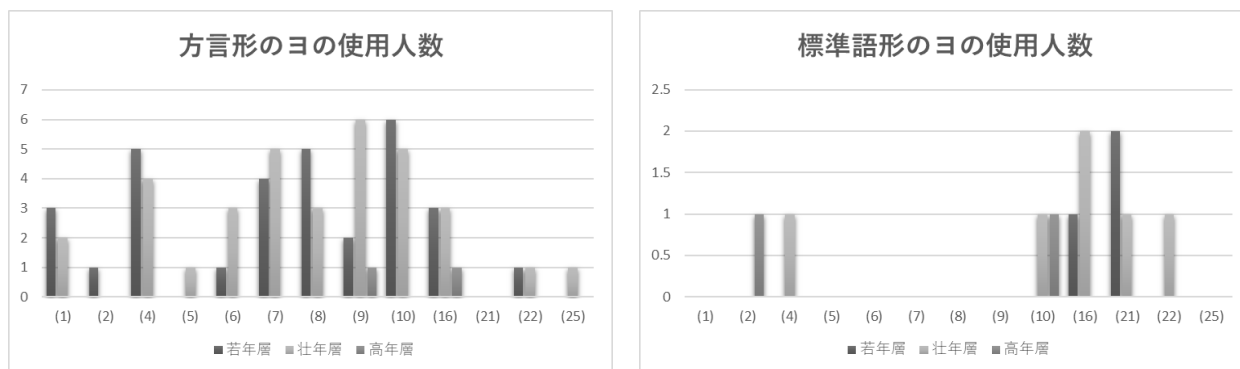


図 3: 方言形のヨと標準語形のヨの各質問文ごとの使用人数

(4) (ろ)

(試験も終わったのに、今日は学校に行かなくてもいいのかと尋ねてきた母に対して)

あなた「もう試験終わったから夏休みだよ」→(実際の回答: 夏休みよ 9名)

(4) (ろ) あなた「もう試験終わったから夏休みだよ」→(実際の回答: 夏休みだよ 1名)

「ヤンに置き換わっていつているバイは独り言のように用いられるものに関してである」という記述の裏付けを今回の調査でできた。

そして「当たり前である、前提である」ということに気づく、「気づかせる・思い出させる」、「思い出し」の語用論的意味を持つタイの方が、ヤンと置き換わりやすい」との仮説も正しかった。

¹九州方言学会 (1969: 188) によると、肥筑方言、つまり、福岡県西部、佐賀県、長崎県、熊本県には「いきり」の指定助動詞はない。「私は高校生だ」などの断定表現をせず、「私は高校生」のように断定の言葉を省くか、バイなどの文末助詞を添える。

5. 追加調査

高山 (2016) が改善点として挙げていた、より自然な会話での使用データを得るため、追加で録音調査を行う。言語形成期 (おおむね 3-15 歳まで) の間のほとんどを福岡市で過ごしたという条件に該当する者と電話で会話をし、実際のバイ・タイ、ヤン・ヤロを含む代替形式の出現数を比べ、それぞれどれほど用いられているのか、使用状況を調べる。

4 節で示した筆記調査において、特に代替表現の使用が著しかった若年層に着目し、若年層福岡方言話者と筆者との会話を録音する。全員 2000-2001 年生まれの 20-21 歳の女性で、生活環境の異なる 3 人を対象とする。全員、福岡市内で小学校から高校時代までを過ごしており、この観点から同じ状況である筆者自身の発話もデータとして扱うことにする。コンサルタント間での録音時間の偏りはある。合計の録音時間は 3 時間 49 分である。

5.1. 調査結果

調査の結果、約 3 時間 49 分の会話から、バイ・タイは 4 例、ヤン・ヤロは 39 例観察された。表 3 にコンサルタントごとの詳細、表 4 に観察されたその他の表現を示す。

表 3: コンサルタントごとの詳細と総計

コンサルタント	生年	性別	生活環境	録音時間	バイ・タイ 用例数	ヤン・ヤロ 用例数
コンサルタント A	2001	女	現在も福岡市に住む	1:35:45	2	4
コンサルタント B	2001	女	東京住みだが 1 ヶ月の福岡市滞在中	1:09:27	2	30
コンサルタント C	2000	女	現在は東京にいる	1:04:03	0	5
総計				3:49:15	4	39

表 4: その他表現

ト	27
ケン	15
ツチャン・ツチャロ・ツチャナイ	11
ヨ	7
ゲナ	2
ジャン	2

5.2. 調査結果の分析

調査結果より、バイ・タイは 4 例、それに対しヤン・ヤロは 39 例の使用が観察された。

ここからやはり高山 (2016) でも述べられていたように、バイ・タイはその使用が少ないことが分かる。また同研究の、ヤン・ヤガと機能が似ている標準語の「ヨ」が用いられるという記述に関しては、ヨが 7 例用いられていることから正しいと言える。

例: それって私たちの学校のことだヨ (ヤンが想定される)

また現在の生活環境が結果に影響を与えると予測したが、福岡にずっと暮らしている者、福岡に1ヶ月間のみ滞在している者、東京で暮らす者の間では、標準語が多く出現するなどの影響は特に見られなかった。

ヤン・ヤロに関して、全39例のうち13例が疑問で用いられていることも興味深かった。

例: こないだLINEで「今出かけとる」って送ったヤン? (聞き手が知っている事実)

かっこいいヤロ? (聞き手に同意を求めている)

違うヤロ? (相手の発言に対して客観的に間違っていることを示す)

私めっちゃ寝るヤンか? (聞き手が知っている事実)

これは、バイやタイには相手に問いかける意味機能は持たないため、代わりにヤン・ヤロが用いられるようになったためと考える。

またヤンにはないヤロの機能として、その語のみで相手に問いかけることができるため、調査においても上記の13例のうち3例用いられている。

例: [話者A] こないだ教えてくれたカフェ行ったんよ! めっちゃ良かった!

[話者B] ヤロ? 今度一緒行こう!

6. まとめと今後の課題

今回の調査では、文末助詞バイとタイが各世代でどれほど用いられているのか、代替形式には何が用いられているのかを明らかにした。調査の結果、若年層にはバイの使用があまりみられず、タイにおいても一部の意味機能でしか用いられないことが裏付けられた。壮年層においては、若年層に比べバイとタイの使用が多かったが、数は多くない。高年層になると、バイの使用が他の世代より多くみられた。また若年層を中心に、ヤン等の代替形式の使用が多く、壮年層や高年層の一部の回答にも代替形式がみられたことから、ますますその使用が高年層にも広がっていくのではないかと考えた。

筆記調査において70代などの高年層のデータを収集する際、Googleフォームを用いたことで打ち間違いと思われる箇所や質問の読み違いや捉え方がこちらの意図したものではない箇所があった。高年層のデータを得る際においても会話を録音する等の方法をとれば、より正確なデータが収集できると考えたため、これを今後の課題としたい。

参考文献

九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』東京: 風間書房./ 陣内正敬(1997)「総論」平山輝男編『日本のことばシリーズ 福岡県のことば』1-38. 東京: 明治書院./ 高山彩(2016)「福岡市方言の文末詞「バイ」「タイ」の福岡部若年層における使用実態と代替形式について」『国文研究』61: 19-86./ 平川公子(2008)「福岡市方言における文末詞バイとタイ」『阪大社会言語学研究ノート』8: 116-131./ 47 都道府県の地図 <https://uub.jp/map/fukuoka/> (2022年9月14日参照)